

# 医療現場で働く看護師のヒヤリハットに影響を与える要因 (2)

## ー 共分散構造分析を用いた検討ー

○兵藤好美<sup>1</sup>・迫田裕子<sup>2</sup>・田中共子<sup>3</sup>

(<sup>1</sup>岡山大学医学部保健学科・<sup>2</sup>岡山大学社会文化科学研究科・<sup>3</sup>岡山大学社会文化科学研究科)

Key words : ヒヤリハット, 職場ストレス, 看護師

### 目 的

医療現場におけるリスクマネジメントの具体策として、1件の重大事例の背景に300件あるといわれるヒヤリハット報告を分析していくことの重要性が指摘されている。そうした事例検討のみならず、人間の複雑な適応状態や事故に至る過程を表現するために、多様な要因間の関連性を組み込んだモデルの構築が望まれる。しかしヒヤリハットを誘発するメカニズムの詳細や、背後にある要因間の相互関係などを扱った、精密で包括的な報告はごく僅かである。

我々は先に、ヒヤリハットの誘因となりうる複数の要因をあげ、それらがストレス反応を高めて、ヒヤリハットの発生を促していくというモデルをパス解析により検討した(兵藤・迫田・田中, 2006)。本研究ではデータの追加収集を行い、モデルの安定化を目指した。

### 方 法

**調査対象者:** 先に得た A 病院の 157 名分のデータに加えて、今回新たに B 病院、C 病院に勤務する看護師を対象に、倫理委員会で承認を得て質問紙調査を実施し、有効回答 366 票を得た。今回はこれらを合計した 523 票について分析を行った。

**質問紙:** ヒヤリハットに関連する総合的な質問紙を構成したが、今回の分析では以下の項目を使用した。①兵藤ら(2006)が作成したストレス尺度、②兵藤ら(2006)が作成したヒヤリハット尺度、③アサーション尺度(平木,1993)、④職業ストレス検査(田中・渡辺,1998)のうちストレス反応関連項目、⑤一般性セルフエフィカシー尺度(坂野・東條,1986)、⑥日常エラー尺度(兵藤・田中,2005)。

### 結 果

いかなる要因がヒヤリハットの発生に影響を及ぼすかを検討するために、共分散構造分析を行った(Figure1)。その結果、ストレス反応に対しては、ストレスが有意な正の影響を示し、自己効力感とアサーションが有意な負の影響を示していた。すなわちストレスが高く、アサーション能力や自己効力感が高い者ほどストレス反応が低い。ヒヤリハットに対しては、ストレス反応と日常エラーが正の影響を示し、自己効力感が負の有意傾向を示した。つまり、ストレス反応が高い者、日常エラーの多い者はヒヤリハットが多い。なお、ヒヤリハットはストレス、アサーションから直接的な影響を受けていなかった。

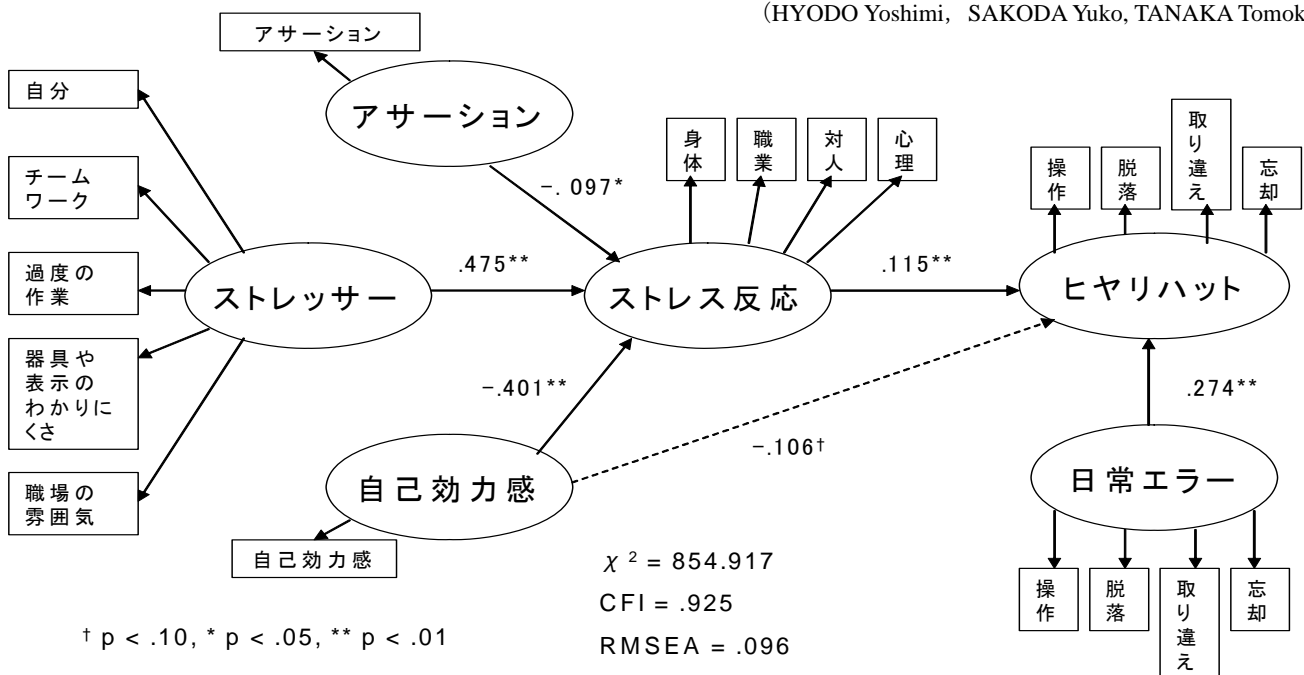
### 考 察

ヒヤリハットに影響を及ぼす要因について検討したところ、ストレス反応が多い場合にはヒヤリハットも多くなる、という傾向が前回と同様に確認された。個人がストレス反応を多く示すような状態は、ヒヤリハットの発生もまた懸念される状態であると言えることができる。また、前回は見られなかったが今回見られるようになった影響としては、日常エラーからヒヤリハットへの正の影響である。つまり、日常生活の中でエラーを多く経験している者は、ヒヤリハット頻度が高い。この解釈としては、日常エラーをおかしやすい者はヒヤリハットを起こしやすいという可能性と、日常エラーを多く経験する者はヒヤリハットに気づきやすい、という可能性の両方が考えられる。

### 引用文献

兵藤好美・迫田裕子・田中共子 2006 医療現場で働く看護師のヒヤリハットに影響を与える要因 日本心理学会第70回大会発表論文集, 182.

(HYODO Yoshimi, SAKODA Yuko, TANAKA Tomoko)



† p < .10, \* p < .05, \*\* p < .01

Figure1 ヒヤリハットに影響を及ぼす要因に関する共分散構造分析